

◇ 国 語

国 2-1～国 2-17 まで 17 ページあります。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「少年老い易く学成り難し」とは、作者不明の名言である。学業は容易には進まない。少しでも気を抜くと、またたく間に年数が過ぎてしまう。あつという間に年を取り、勉強の量も減り、当初想定した計画にはまったく届かないほど、勉強ははかどらないままになる。それは確かに事実である。気が付いたときには、良く言えば余力を最大限に活用すべく繰り返し計画を立て、実質的には残された乏しい日数のなかで、なんとかやり繰りすることに腐心することになる。いわば縮小再生産であり、成熟とは残された日数に合わせて、計画を縮小するプロセスのことでもある。

このことわざの出典は、朱子（朱熹）の『偶成』という漢詩だとされていた。朱子の詩文集に、この漢詩は見当たらない。かなり以前からこの漢詩の出典については、多くの人が疑問に思っていた。文献調査が進んで、この漢詩とルイジしたのは、異なる表題と異なる作者名で、いくつか発表されていたことが分かってきた。作品が朱子の詩として公表されているのは、明治時代の日本の漢文教科書からであるらしい。書き下し文は、以下のようになっている。

少年老い易く学成り難し

一寸の光陰軽んずべからず

未だ覚めず池塘春草の夢

階前の梧葉已に秋声

やろうと思えば勉強のできる年代は、実際そう長く続くものではない。それどころかキガイが擦り切れ、テンションも落ち、瑞々しさが失われて、なにか間の抜けたような勉強になつてしまうことも多い。

少年に固有の経験の弾力や経験の可動域がまたたく間にすり減って、実用向きの経験に作り替えられてしまう。そうなるのとただ時間をかけているだけのやつつけ勉強になつてしまうこともある。勉強に特有の野心や思い入れや夢想が次々と削られ、おのずと青くさがさが消えてしまう。だがこの青くさは、むしろ残しておくべき部分が多いのである。青くさは、気負いとは異なる。未来を担保にした自己主張とは異なり、別段力を入れなくても、なにか身の丈を超えたものを求めてしまうこ

とに近い。

「学成り難し」とは、若い間の勉強時間が足りていないことではないのだろう。あるいは自分のやってきたことが、あまりにもごくわずかなことにしか届いておらず、人間の一生はこんなにわずかなことしかできないのかと、しばし感嘆することでもないであろう。

ウ 学び工夫する経験が縮小し、経験の柔らかさが失われ、経験そのものを組み替えるような局面に立ち会うこともできなくなる。いわば経験のモードがまたたく間に老いてしまうことを意味するのであろう。

「経験の可動域」が狭くなり、「意識の可動域」も狭くなって、気が付けばすでに世の中が理解できないことだらけになっている。あるいは逆にすべてのことが理解できてしまう。逆に言えば、理解できることだけに視野が限定されている。その場合にはどちらかと言えば、理解しなくてもよいことだけに注意の範囲が限定されている。あらゆるものが理解できてしまったり、なにもかも理解できなくなるのであれば、経験はすでにオン・オフの両極を動いている。たとえば膝をゆっくりと曲げたり伸ばしたりするような弾力がなく、すべては両極に振り分けられてしまう。これでは通常の柔らかな歩行さえできない。

身体と同じように経験にも弾力があり、可動域の自在なカクチョウ、収縮がある。とすると「少年老い易く」というのは、「少年」というのが長期間維持しにくい特有の経験のモードであることを意味する。「少年」を発達の一時期という時間区分ではなく、むしろ経験の特有のモードだと考えていくのである。「少年」は、発達上の生理的年齢で見れば、またたく間に終わる。それは事実である。しかし、経験のモードとしての少年を維持したり、繰り返し少年の経験のモードに戻っていく工夫があるに違いない。そうした工夫について考えてみたいと思う。

少年をある経験のモードの典型例として扱うと述べたが、同時に「少年」という発達段階を参照項として活用する。その意味では、大人というものもある種の経験のモードであり、同時にヒンドとして最も確率の高い年齢層を指す発達段階についての総称でもある。

『論語』の「為政編」には、「吾、十有五にして学に志す」という言葉が出てくる。学に志すとは、町の塾に通うようになり、本気で勉強するようになったということではないのだろう。儒家の「儒」はひらひらした着物のことであり、儒家は一般には冠婚葬祭を執り行うことを職業とする一群の人たちを指す。冠婚葬祭を執り行うことは政治の主要な業務でもあった。しかし、そ

うした儀式の細々とした作法を学ぶことが、学に志すということでもないだろう。

むしろこの世の中のこと、世界のこと、死後のこと、人生のこと、宇宙のこと、さらには正義とはなにか、愛とはなにか、悪とはなにかを本気で考えるようになったということだと思える。そうだとすると孔子は エ 遅くなってからこうした問いに目覚めたことになる。孔子はどこか晩熟である。

こうした問いは、解答の出るような問いではなく、少なくとも解答が一つに決まるようなものではない。そしてひとときそうした問題についてもいくばくか考えてみて、そんな青くさい問いから離れてしまうことで、人は普通の大人になる。そんな問いをいつまでも抱えていれば、社会人としてはむしろ奇人、変人である。

だがこれらの問いは、解答が出ないのでホウキ^Fしてしまうというタイプの問いではないとも思える。解答の出ない問いであることが明らかになっても、なおそれぞれの人の心になんらかの形で残っているところを見ると、そうした問いには固有の意義があるのであり、解答が出ないのはそもそもその問いがそうしたものであるか、問いへの解答の仕方があまりにも オ すぎたのかもしれない、さらには問い方を誤っていたのかもしれないのである。

あるいは、解答を出すこととは異なるかかわり方がある。解答を求める思いに対して、問いそのものが消えていくこともある。なにかが断念され、忙しさに紛れて問いそのものが消えてしまうこともあれば、問いが時間の経過とともに問いではなくなるといふこともある。

問いそのものが自分のなかに内在してしまい、自分の存在そのものが一つの問いになってしまうこともあるだろう。このときにはそのまま「疑問符」として生きていくことになる。これは問いに解答をあたえて決着をつけるのではなく、むしろ問いそのものを生きていることに近い。解答をあたえることとは異なる仕方で役立つ問いはあり、そのような仕方でかかわることが有効な問いもあるように思われる。

(河本英夫『へわたし』の哲学』による)

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A ルイジ

- ①イクジ|休暇をとる
- ②検査がブジ|に終わる
- ③ソウジ|形の絵を描く
- ④ジ|ダンが成立する
- ⑤弁当をジ|サンする

1

B キガイ

- ①ショウガイ|独身で通す
- ②特例はジョガイ|する
- ③カンガイ|をこめて歌う
- ④人畜にキガイ|を加える
- ⑤タイガイ|のことでは驚かない

2

C カクチョウ

- ①核のカク|サンを防止する
- ②失敗はカク|ゴの上だ
- ③会社の採用がカク|テイする
- ④新番組をキカク|する
- ⑤古い制度をカク|シンする

3

D ヒンド

- ①ヒン|シュを改良する
- ②地震がヒン|パツする
- ③ヒン|プの差が激しい
- ④シュヒン|として招く
- ⑤カイヒン|を散歩する

4

E ホウキ

- ①反戦のキウ|ンが高まる
- ②キ|フを集める
- ③投票をキ|ケンする
- ④宇宙からキ|カンする
- ⑤合格をキ|ガンする

5

問二 空欄

ア

イ

ウ

エ

オ

からそれぞれ一つずつ選べ。

に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中

ア

- ① それでも
- ④ おそらく

- ② あるいは
- ⑤ もちろん

③ しかし

6

イ

- ① ところが
- ④ さらには

- ② にもかかわらず
- ⑤ または

③ ただし

7

ウ

- ① かならず
- ④ かえって

- ② むしろ
- ⑤ そのうえ

③ それゆえ

8

エ

- ① 比較的
- ④ 年齢的

- ② 普遍的
- ⑤ 精神的

③ 表面的

9

オ

- ① 本質的
- ④ 懐疑的

- ② 一般的
- ⑤ 哲学的

③ 直接的

10

問三 傍線部（一）「腐心する」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①心が折れて、やる気をなくすこと
- ②困難や危険にもひるまず突き進むこと
- ③あれこれと考えて心を悩ますこと
- ④自分を偽りながら我慢すること
- ⑤他のことを顧みず一所懸命にすること

11

問四 傍線部（二）「未来を担保にした自己主張」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ①自分の未来を信じて思うところを強く主張すること
- ②自分の未来について想定できないと主張すること
- ③自分の未来について他人まかせにして主張すること
- ④未来は不透明なので自信のない主張をすること
- ⑤未来とは関係なく自分の身の丈を超えたものを求めること

12

問五 傍線部(三)「学成り難し」とは、若い間の勉強時間が足りていないことではないのだろう」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

13

- ①人が老いると経験が豊かになるために不必要な勉強はせず、実用向きの勉強しかしなくなる事
- ②若いうちに勉強しておかないと、年老いた時に勉強してもなかなか理解できないということ
- ③人が老いると学び工夫する経験が縮小し、経験の柔らかさが失われてしまうということ
- ④少年時代というのは発達の一時期という時間区分ではなく、経験の特有のモードであるということ
- ⑤若い間に勉強していてもいなくても、年老いれば学問は思うようにはかどらなくなるということ

問六 傍線部(四)「学に志すとは、町の塾に通うようになり、本気で勉強するようになったということではないのだろう」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

14

- ①学に志すとは、孔子の『論語』に書かれているように十五歳前後に学問を始めることである。
- ②学に志すとは、当時の政治の主要な業務である冠婚葬祭の儀式の細々とした作法を学び始めるということである。
- ③学に志すとは、解答の出ないさまざまな青くさい問いを卒業して、普通の大人になってゆくことである。
- ④学に志すとは、世の中のことや、人生のこと、宇宙のことなどはいくら考えても解答の出る問いではないので考えても無駄であることを知ることである。
- ⑤学に志すとは、世の中のことや、人生のこと、宇宙のこと、正義とはなにかなどのことについて本気で考えるようになることである。

問七 本文の内容と合致しないものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

15

- ① 成熟とは残された日数に合わせて計画を縮小するプロセスのことである。
- ② 「学成り難し」とは、人間の一生はわずかなことしかできないのだと嘆くことである。
- ③ 「学成り難し」とは、経験のモードがまたたく間に老いてしまうことを意味する。
- ④ 「少年老い易く学成り難し」の出典は、朱子の『偶成』という漢詩だとされているが、実はその作者は不明である。
- ⑤ 解答の出ない問いには固有の意義があり、解答を出すこととは異なるかわり方がある。

第二問 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

日本の社会を「母性社会」と呼んだユング心理学者河合隼雄^{はや}は、父性原理中心のキリスト教社会と母性原理中心の日本社会を対比している。

父性原理の特徴は、ア する機能にある。良い子と悪い子を区別し、強い子と弱い子を区別し、できる子とできない子を区別する。

そのため、父性原理が機能する社会では、能力や個性によって個人を区別するのは当然のこととみなされ、能力の乏しい者や成果を上げられない者は、あつさり[↑]と切り捨てられる。勉強ができない学生が進級できず、ときに退学させられ、仕事のできない社員がコウカク[↑]になり、ときにクビを切られるのは、ごく当然のことだ。このような父性原理が機能することで、人々は強く有能な人間へと鍛えられていく。

一方で母性原理が機能する社会では、個人が何らかの基準で区別されることはなく、能力の乏しい者も成果を上げられない者も、けつして切り捨てられるようなことはない。母性原理の特徴がホウガン[↓]する機能にあるためだ。

学校ではみんなの能力を底上げて落ちこぼれを出さないことが重視され、会社ではできない社員を周囲がカバーすることが求められる。このような母性原理が機能することで、協動的でやさしい人間が育まれていく。

日本では、協調性が重んじられ、集団に溶け込むことが必要とされるが、これも母性原理によるものといえる。個性的に振る舞ったり自己主張したりして自分を際立たせるよりも、みんなに合わせて目立たないようにすることが望ましい。みんな一緒ということが大事となる。

欧米社会と違って、学校で原則として飛び級がないのも、母性原理によるものだ。同じ年齢の子は、能力に関係なく同じ学年で同じように扱われるべきだという考え方が根強い。それでは能力のある子が不満をもつだろう、あるいは成長の機会が失われかねないという発想よりも、そうでないと能力のない子がかわいそうといった感受性の方が強い。ゆえに、相応の学力に達しなくても、

「頑張ってるから」と進級させたり、単位を与えたりということが、当然のように行われる。

ここでしつけの厳しさに目を転じると、アメリカは父母ともに父性的な厳しさをもつ。キリスト教の思想も性悪説に立っており、子どもは厳しく、正しい道に導いていくべきと考えられている。その厳しさが行き過ぎて、1970年代までは子どもの虐待が目に見えるほどであったため、子どもの人権を守る運動が起こった。その後、子どもに対する虐待防止が意識され、体罰より言葉で説得することが推奨されるなど、しつけの過酷さも低減してきているが、相変わらず父性的な厳しさが強いのは文化的な特徴と言える。

(略)

日米の母子のかかわり方を比較検討したコーデイルは、アメリカの母親の方が赤ん坊への働きかけが積極的で、話しかけも多いことを見出した。それに対して、日本の母親は赤ん坊を抱いたり、静かにあやしたり揺すつたりすることが多く、アメリカの母親のように盛んに話しかけたりしない。

赤ん坊が眠ると、アメリカの母親は別の部屋に行くことが多いが、日本の母親は赤ん坊が眠ってもおんぶしたり、抱っこしたりし続けることが多かった。

親子別室のアメリカでは、夜間は赤ん坊の部屋のドアと両親の部屋のドアをそれぞれ少しずつ開けておき、赤ん坊の泣き声が聞こえるようにしておくのが一般的だという。何か異常があったときにわかるようにという方策であろう。

どんなに赤ん坊のことが心配であっても、あくまでも別室にこだわるほど、親は子どもとの間にしっかりと距離を保とうとする。

(略)

アメリカで子どもをよくほめるのは、赤ん坊の頃から親と子は切断され、両者の間には超えられない溝があるため、言葉で愛情や励ましをたえず伝えていかないと、心がつながっていかないということがあるのではないか。

それに対して、日本では、親と子は非常に近い距離を取り、心理的にも一体感をもっているため、あえて言葉で愛情や励ましを伝えなくても、すでに心はつながっている。

心理学者の根ヶ山光一は、食事するときの日英の母子関係を比較し、乳児に離乳食を与える際の共感反応が、日本人の母親に非

常に多いことを発見している。乳児がもぐもぐしているときに、日本の母親は一緒になって口唇を動かす反応が多かった。このことは、日本の母子の間に強い心理的一体感があることの証拠と言える。

この心理的一体感は、幼い時だけのものではない。親子間にも限らない。

少し話は飛ぶが、漱石の『坊っちゃん』の主人公は、自分の片割れだと思っている下女の清には借りがあつても返そうとしないのに、対立しているつもりドウリョウ山嵐には小さな借りも残したがらない。それは、一体感のある間柄では、いちいち「ありがとう」と感謝の気持ちを言葉にしたり、相手のことをほめたりするのは、他人ギョウギで必要ないといった感受性が日本文化には根づいているからだと考えられる。

また、日本人が当たり前にしている「イ」ということにも、心理的一体感が大きく関わっている。次に示すのはある国文学者の回想だ。

「もう三五年も昔のことである。大学の国文科の合格者発表がすんだあと、わたしは、高校三か年を過ごした町の城址じょうしで画架を立てていた。そこへ、老教師が通りかかった。ハンチングを取って挨拶すると、老教師は言った。

『あなたがねえ。』

わたしに、このことばの意味がわかった時、老教師の姿はもう一〇〇メートルも先を歩いていった。

当時は、大学にはいるとすぐ角帽をかぶるのが普通だった。そういう、一種のエリート意識に反発してわたしがハンチングをかぶっていたので、老教師は、てっきり試験に落ちたに違いないと思ったのである」(岡部政裕『余意と余情——表現論への試み』)

ここでは、老教師が発したのが ウ の言葉だったことが、すぐには理解できなかったときのことか述べられている。

岡部は、ある言葉を理解するには、言葉以前のもの、あるいは言葉に表現されないものが、前提として理解されていなければならない

らないという。この例で言えば、試験に落ちて気の毒だと思い込んでいた老教師の気持ちを察することができない限り、「あなたがねえ」の意味はわからない。

岡部は、さらにつぎのように続けている。

「ことばによる表現とは、表現されないものがまずあって、その全体のほんの一部分が、音声・文字などに感覚化されたものである。したがって、表現されたものを通して、表現されないものまで理解することが要求されるのである」（同書）

親子が切り離されず渾然^{こんぜん}一体として溶け合っている日本的な母性社会では、ほめる前からすでに甘え^{こゑ}による心の交流がイヤというほど行われている。もともと心理的一体感があるのだから、親子が愛してるなどと言いつつ必要はない。親がいちいち子をほめなくても、親の子に対する愛情は十分に伝わっている。濃密な心の交流がある。そのため甘やかしが起こりやすく、厳しい父性をタテマエとして掲げること、甘さをエ^Eしてきた。むしろ、心の中では子どもの活躍が嬉^{うれ}しくてたまらないのに何でもないフリを装うなど、言語的に距離を取ることも、心理的密着のヘイガイ^Eを防いできた。

そこに「ほめて育てる」という思想が入ってきた。文化的伝統の違いをまったく考慮せず、海外のやり方は何でも素晴らしい、日本は遅れてると言いたがる浅い専門家や評論家が、その思想をもてはやし、日本の教育界にも広まっていった。

そこで大混乱が起こったのではないだろうか。日本的な母子一体感と「ほめて育てる」が合体し、子どもにとって最強の甘い関係ができあがったのである。このことが子どもや若者の心の発達にさまざまな問題を引き起こしていると考えられる。

（榎本博明『ほめると子どもはダメになる』による）

問一 傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

A コウカク

- ① 権利をカクトクする
- ② エンカク操作を行う
- ③ 先人のカクゲンに学ぶ
- ④ 慈善事業へのサンカク
- ⑤ 方針をカクリツする

16

B ホウガン

- ① コウガン無知な人
- ② ヒガンを達成する
- ③ ガンキョウな建物
- ④ 周囲からハクガン視される
- ⑤ ガンチクのある言葉

17

C ドウリョウ

- ① 任期がマンリョウする
- ② 盗賊のシュリョウ
- ③ キョウリョウな人間
- ④ カクリョウ会議を開く
- ⑤ イリョウ関係の仕事

18

D ギョウギ

- ① 病気にナンギする
- ② 説明にギギを抱く
- ③ シツギ応答に臨む
- ④ ギメイを用いる
- ⑤ サギ罪に問われる

19

E ヘイガイ

- ① ヘイコウ感覚を養う
- ② オウヘイな態度
- ③ カヘイ価値が上がる
- ④ ヘイサされた空間
- ⑤ 神経がヒヘイする

20

問二 空欄 ア・イ・ウ・エ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選ぶ。

ア

- ① 切断
- ② 差別
- ③ 観察
- ④ 批判
- ⑤ 観察

③ 整理

2 1

イ

- ① 信じる
- ② 念じる
- ③ 愛する
- ④ 恥じる
- ⑤ 察する

③ 愛する

2 2

ウ

- ① さげすみ
- ② はげまし
- ③ いたわり
- ④ からかい
- ⑤ おどろき

③ いたわり

2 3

エ

- ① 反芻 はんすう
- ② 中和
- ③ 助長
- ④ 無視
- ⑤ 昇華

③ 助長

2 4

問三 傍線部 (a) 「漱石」とあるが、夏目漱石が書いた作品ではないものを、次の①～⑤の中から一つ選ぶ。

① 三四郎

② ころも

③ 吾輩は猫である わがはい

④ たけくらべ

⑤ 門

2 5

問四 傍線部（b）「表現されたものを通して、表現されないものまで理解する」とあるが、こうした意味を表す慣用句として正しいものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 行間を知る
- ② 行間を読む
- ③ 行間を見る
- ④ 行間を悟る
- ⑤ 行間を汲み取る

26

問五 傍線部（c）「海外のやり方は何でも素晴らしい」とあるが、このように他者に盲従するさまを表す四字熟語として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。

- ① 付和雷同
- ② 呉越同舟
- ③ 温故知新
- ④ 汗牛充棟
- ⑤ 博覧強記

27

問六 傍線部（一）「母性原理」とあるが、その原理が機能している実例として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

- ① 演技力が一際優れている新人俳優に対し、舞台制作者が主役^{ぼってき}抜擢のオファーを出した
- ② 新商品の売り上げ実績が最も良かった社員に対し、会社が特別手当を支給した
- ③ 定期試験の成績が芳しくなかった生徒たちに対し、教員が放課後に特別補習を行った
- ④ 試合での成績が伸びなかった野球選手に対し、チームが戦力外通告を出した

28

問七 傍線部(二)「アメリカの母親の方が赤ん坊への働きかけが積極的で、話しかけも多い」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

29

- ①アメリカでは、母親が愛情表現を行うことによってこそ、子どもの精神が安定し自立を促せるという社会通念があるため、おのずと赤ん坊への働きかけが多くなるということ
- ②アメリカでは自分の主張を言語化して表明する機会が多いため、母親が赤ん坊と交流を図る際にも、言葉を媒体とした働きかけが必然的に多くなるということ
- ③アメリカでは、子どもとの身体的な密着性が薄く、幼い頃から子供との距離を置こうとする傾向があるため、それを補う働きかけが多くなってくるということ
- ④アメリカでは、幼い子どもも大人と同等とみなすと考え方が一般的であるため、赤ん坊のうちからコミュニケーションを取ることに慣れさせようとするということ

問八 傍線部(三)「甘えによる心の交流」とあるが、その説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

30

- ①母親が子どもからの要求に対して誠心誠意応えようと努力することで、信頼関係が培われているということ
- ②母親が子どものよい部分を強く意識し、叱らずに愛情を注ぐことで、心の交流が良好に行われているということ
- ③母親がいつも子どもの傍にいて、自分と子どもの共通点を意識的に見出そうとすることで、一体感が増しているということ
- ④母親が常に子どもとスキンシップを取ったり行動をともしたりすることで、精神的な絆が育まれるということ

問九 本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から一つ選べ。

31

- ① 心理学者の河合隼雄は、キリスト教社会と日本社会における親子関係のあり方を対比し、両者に明確な差異が存在することを示した。
- ② 親が子どもをほめることは自己肯定感を持たせる上で重要であるが、それが行き過ぎてしまうと人格形成に悪影響を及ぼすこともある。
- ③ 日本では、一体感を持つている相手に対して愛情や感謝の言葉をあえて伝えようとしめない傾向があるが、それは親子関係に限ったものではない。
- ④ 日本社会では周囲と同調することが必要とされるが、国際化が進むにつれて、子どもの個性を育む重要性もまた認識されるようになった。
- ⑤ 心理学者の岡部政裕は、大学合格後に老教師とやりとりをした経験を例に、ことばに表現されないものを察する力の重要性を指摘した。
- ⑥ 父性原理が機能するアメリカでは、子どもへの厳しいしつけが行き過ぎて虐待が多発する傾向にあり、その数は現在もなお増加している。